

洛東遺芳館本『源平軍論』

山田和人

はじめに

昭和五十八年六月から、洛東遺芳館（京都市東山区問屋町通五条下ル三丁目西橋町四七二）に所蔵されている演劇関係の板本を、同館長香川聖一氏の御好意により調査する機会を得、同志社大学の向井芳樹先生を中心に、その書誌調査を行った。その際、発見された古浄瑠璃の newly 資料の一つが本書であった。

従来、『源平軍論』の正本としては、国立国会図書館に所蔵されている江戸板の正本だけが世に知られており、『国書総目録』にもその一本だけが紹介されている。この国会図書館本については、『古浄瑠璃正本集』第六に翻刻・紹介がなされている。今回発見された洛東遺芳館本は、大坂の書肆西沢太兵衛より刊行された上方板の正本であり、その本文は国会図書館本よりも古態性をとどめてい

る貴重な一本である。その位置づけについては、昭和五十八年度の日本近世文学会秋季大会の報告に譲る。

なお、本書の翻刻に際し、資料の閲覧および翻刻・紹介を御快諾下さいました洛東遺芳館館長の香川聖一氏に重ねて感謝申しあげます。また、翻刻にあたり、阪口弘之氏、富井康夫氏、山根為雄氏には貴重な御示教を賜りました。資料の調査の折には、向井芳樹先生をはじめ、小川嘉昭氏、鈴木一夫氏、友田博氏、山崎睦也氏の協力を得ました。記して感謝申し上げます。

解題

所蔵 洛東遺芳館（京都市東山区問屋町通五条下ル三丁目西橋町四七二）

装幀 半紙本。縦二一・六糎、横一五・三糎。

表紙 元表紙。見返し部分が割れており、そこに右から、「甚五郎」

「片山村」と墨書されている。

匡郭 重郭。縦一八・一横、横一二・八横。

題簽 元題簽。重郭。縦一八・八横、横五・五横。

直之	けんへいいくさろん	新板
正本	源平軍論	正本屋
うづし	かまたひやうゑてうのつかひの事	太兵衛

内題 源平軍論。

段数 六段。各段の冒頭に次のように記す。

源平軍論 初段

源平いくさろん 二たんめ

源平軍論 三段目

源平軍論 四段目

源平軍論 五段目

源平軍論 六段目

初段のみ、二行分で記す。

丁数 一八丁。

行数 一六行。字数は一行あたり、五〇字前後から七〇字前後。

板心 上方に「軍」「イクサ」「イクサロン」「軍ロン」「いくさろ

洛東遺芳館本「源平軍論」

所屬 未詳。

挿絵 一六頁分（見開七、片面二）

ん」「けん平」とあり、その下に「一」から「十八」までの丁付を記す。

一ウ・二オ、三ウ・四オ、五ウ・六オ、七ウ・八オ、九オ、十ウ・十一オ、十二オ、十三ウ・十四オ、十六ウ・十七オ。各図に次のような説明がついている。

- 第一・二図（一ウ・二オ）「右」「ごとう兵へ」「さゝぎげんざう」「はたけ山庄司」「みうらの大すけ」「いさはの六郎」「かまたひやうへ」「あら二郎よしすみ」「左」「大將よしとも」「すきもと太郎」「くまかへの二郎」「平山むしやところ」「同二郎すへしけ」「いのまたの小平六」
- 第三・四図（三ウ・四オ）「右」「平家大將きよもり」「ちくこのかみ家きた」「左」「へいけのくんせいにくる所」「みずみの源二」「しろの兵さんくゝにいる」
- 第五・六図（五ウ・六オ）「右」「みうらの大介」「かまたひやうへ」「ごとうひやうへ」「はたけ山庄司」「大將よしとも」「平山のすへはる」「左」「ひら山のすへしけ」「くまかへの二郎」「くりはまかくひ」「みうらのあら二郎」「すきもと太郎」「よししけかくひ」「いのまた小平六」

第七・八図(七ウ・八オ)「右」「平きよもり引かへす」「平山すへしけかけよる」「左」「しやきやうすゑはる」「いからの藤太さいこ」「しやうの**内兵**」

第九図(九オ)「すぎ本太郎」「あら二郎」「小平六」「かまた兵へ」「平山すゑはる」「大将よしもと」「すゑしけかけ出る」「くまかへの二郎」

第一〇・一一図(十ウ・十一オ)「右」「すぎもと太郎」「いゑきたすぎもとしろんノ所」「よしの」「花月のまへ」「四ばんつくり物」「三ばんノつくり物」「二ばんノつくり物」「左」「一番ノつくり物」「たつたのまゑ」「きよやうのまへ」「けんじぎた本」「平のきよもり」

第二二図(十二オ)「すぎ本太郎」「てきノ物いけ取」「すへしけ」「くまかゑの二郎」「いの又ノ小平六」「あら二郎」

第一三・一四図(十三ウ・十四オ)「右」「すぎ本太郎大刀おる」」「みすみのけんし」「あら二郎くひとる」「うすいの形部」「左」「くまかへの二郎」「きとうくむ所」「平山むしや所すへしけ」「あらいしなける」」「こんへいらく」

「いるまのすくねみつあきら」

第一五・一六図(十六ウ・十七オ)「右」「すぎもと太郎」「いかのはんくわん」「とをくみのくわん者」「かまた兵

へ」「さまのかみよしとも」「のむむら兵こ」「さ大しん」「くわんはく」「左」「とはのいん」「源平のそでう」「う大へんもくろくよみ給ふ」「ひらのゝ九郎はくでうす」「きよもり」「ちくこのかみ」「けんじぎたもと」「きくち」「はらた」

節譜 「三重」が、初段にのみ二箇所付されている。句切れは・点。なお、句切点が行の左に付される場合もある。

刊記 終丁、本文末にある。
「右」一字「言不略以正本開之者也」、下に重郭で「明曆四仲秋吉旦正本屋太兵衛」とある。

翻刻凡例
一、仮名遣・濁点・句切点・繰り返しはすべて原本に従った。
一、漢字は現行の通行字体に改めた。
一、特殊な略体・草体などもおおむね現行の字体に改めた。

ハ・ミ↓は・み、ろ↓より、但し、廿、卅および斗はそのままとした。
一、原本の文字が損傷などにより判読不能の場合は□としたが、推定判読した文字は□に入れた。

一、明らかな誤りも原本通りとし、行間に「ママ」を付し、疑問箇所には行間に「―カ」と付した。
一、改行は原本に従わず、適宜設けた。

翻刻本文

源平軍論

初段

さてそのうち、天下いつとうちやうきうに、かわらぬまつわかみどり、のどかにめぐるはるのひの、うごかぬくにこそめてたけれ、その比四かいの国王〔ウヤ〕ば、人王七十たいとばのいんとこうし奉る、御せいとくよみにみち、たみをなてさせ給ふこと、ぶもせきしをあいすることならず、され共天ちのしい〔ウヤ〕とうは、いくとしてきたまらず、国に一人あく人あれば、はんみんをなやますとかや、

ころはくわんとくくわん年正月六日、しやしよくの者一人しもくちに相つめ、うつたへ申けるやうは、是はしなのよくに、すわ大明神のしんにんにて候、然にゑちごしなの大將、みすみのはんくわん国しけ、すわのやししろの御ちうもつのよろいかふとをむたいにばいし、あまつさへふけのたから是にすぎし、しよれう五千丁のきしんにかへ申おろさんと、はやりふしんにおよび候間、かんぬしう京のしん罷出、是はたうしや明神むくりたいちのとき召れたる、御物のくとして、たい一の御しんもつなれば、まつひらこめんなるべしと、たつて申候へはしゆこたる者の心にまかせぬきつくわい也と、たうぎにかんぬしをせつかい有、しやたんにちをあやし、ものよくをうばい取給い候たん、たくなきふるまい、とかくちよくさいを

あふき奉ると、大いきついでそうしける、みかとゑいふんましく、誠に申とをりならば、あくきやくはなはたかきりなし、然共一はうを聞いていかも也、国しけを召上せ、くわしきたんをたもさん、とくくとのせんしにて、六あのかかしはや馬にうちり三重しなのをさしてそ、いそぎける

しなのになれば、あんないこふて内に入、国しけにたいめんしせんのおもむき相のぶる、国しけ聞もあへす、さては右のあらましゑいふんになつし、召のちよくしたるへし、此上はのかるくに所なし、しやいつまでとちよくしのくひ、あへなくきつておとせしは、すは明神の御はつをあたるしるし也、されはにや国しけは、ほくろくたう七か国に、一もんその数みちくたれば、のこらすやかたにはせあつまり、かん主せつかいのたん、すこふる大事也と、ないき

(一オ)

挿絵第一図(一ウ)

挿絵第二図(二オ)

ひやうてうする土〔ウヤ〕に、此由を聞、今はせんきもよしなしと、くにしけかまへに出、此上は一もんけらいの者までも、とうさいほとんとまぬかれし、とてもきへんすつゆのみ、天かのせいを引うけ、なをこうたいにのこしおき給へと、すむれば、国しけゑつきかきりなく、たのもしく、きはうたちの一めいを、はうしんにうくるより

外たしなすと、ひた／＼と思ひ立、れんはんの侍、三百よにん一みとうしんに、じんついをのみ、つかうさうへうかけて六万よき、うへた山をしやうくわくとさため、うつてのせいを三重今や／＼と侍いたり

此こと都に、かくれなく、みかとけきりんかきりなく、源平の兩大将へちよくしたつ、然共ためよしは、ひやうきゆへへ、いけの大將きよもり斗あからるゝ、よつてかさねてちよくしたち、めうたいとして、ちやくしよしともさんたい有、みかとゑいふんまし／＼くて、かくのたんのしさい也、是いこくのけつちうにも、十はいしたるあく人、よつてしけいにさたむる、かの国しけは一いひろき者なれば、よりきのともからおほからん、かた／＼両はたにてはつかうしけいはついたすへし、両方のちよくしとして、六てうの中將さたもとをそへらるゝ、何れもちよくせんかうむり、いさいに及すちよくてう申罷立、たかにやうい有へしと、やかた／＼にかへらるゝ、去程によしとも、みたちにかへらせ給いけんし、十たいの御きせなか、けんだかうぶぎぬ、同けのかふとのをよしめ、きんのさいをおつ取、よはのていより出させ給へは、御めのとこ、かまた二郎まきよ、みうらの大介よしあきら、すとうきやうふとしみち、こたう兵へさねもと、はたのゝ二郎のぶかけ、はたけ山のせうし二郎しけよし、さゝきのけんさうひてよし、いさわの六郎道のぶ、かぶとの

ほしのいらかをならへなみいたり、さてめての御かたには、とう国より今のほりのわか、侍、平山のむしや所すへはる、二なん平山の二郎すへしけ、いのまたのこん平六のりつな、くまかへの二郎なをさね、すきもと太郎よしかと、しやていあら二郎よしすみ、以上六き思ひ／＼のよろいをき、御まへにしかうす、

よしとも御らんし六人のわかむしやが、こしざしは、人にかはりてやう有け成者哉、まつさきのひら山のむしや所すへはるか、かたをなみとかきたるさしものには、さためて心有らん、すへはる承、さん候、きいの国、わかのうちと申所には、どつ（ニウ）と打なみ斗にて引なみさらに候はず、さるによつてかたほなみとなつて、めい所のかすにこしんもよみ置給ふ打て引事なきはぶしののそみ、何ことか是にまさり申へき、かゝるはたをさすならば、おくひやうしこくのしんていも、はたのものにはちひくへき所をも相さゝへ、ふりよのりうんもやとそんし、さてこそさして候、

よしとも聞召、あつはれふかき心かけ、さすか平山のむしや所ほど有けるよ、さてそのつきの平山の二郎か、かめのかしらのさし物、是にもさためてられいき有へし、すへしけ承、さん候それかし相すみ候ひかしにあたつて、まんこうかいけと申て、いか成かんはつにも水たへさるいけ候か、それかし十三才と申はるのくれに、川の水をたゝき上させ、せつしやう仕候所に、川にひたりし者を一人、

何とは存せすみなそこへひつこみ候間、是はとそんしつと入、かの者とひつこみ、つゞけさまに「三力さし」、かしらと思ふ所をおつ取、引上候へは、二丈余のかめ、くたんののおのこをはんふんのみながら、あけに也てあかり候、それよりきつけうとそんし、たへせすもんにあらわし候、よしとも聞召おとろきいつたるはたらき、はしめてきくこそほいなけれ、

さてそのつきのいのまたかさし物は、せんそのことくしらぢに、しゆを以て、一はんといふもしをかき、上に三つくひをさすべきに、さもなきことはなんちいまたしやくねんなれば、しつねん仕て有か、のりつな承、いかてしつ念仕らん、こそんしのことく、それかしか家のはたは、八まん太郎よし家公、あへのきたとうむねとうついはつの時、おやにて候いのまたのせうし、まつさきにくりや川のしやうにはせさんし、しかは、こゑつきあさからす、一はんと有御かき付を給り、そのたゞかいにふん取しよんにすくれ、うち取所のくひしるしのうへにさし、そのちを以て一はんとはたのものにあらはし候、然共それかしは、ちを引はをたにいましたふますして、いかに家のゆつりなればとて、おやのことくに候はん、しよ人のあさけりはつかしく存、わざとひかへ候、もし今度のたゞかいに、命ながらへかいちんいたし候は、むかしのことくはたのもんあらはず、よもはんへらんと、へんせつきよく申せしは、けにゆゞしくそきこ

へける、よしとも聞召、申所しこくせり、そのつきのくまのさしものしさいは（三才）

挿絵第三圖（三才）

挿絵第四圖（四才）

いかに、なをさね承、さん候過つるゑいおうのころ、われ／＼か、ちうしよのへんに、いづく共なくくまあらはれちうやに人をとりくらしい候間、ばんみんおそれ、かよいもすでにたへ候間、その時はそれかし、生年十一才、こ心にもけた物になやまさされ、わうらいとまることむねんにそんし、はゞにしのひ罷出、一むらずゞきのもとにてかのくまとひつこみ、ふゑのねを只一刀にさしとをし、たけ七ひろのくまをそくしに打とめ候それよりしてそれかしかあざなをくまとうじとしよ人よひ候、そのゝちなをあらため、すなはちくまがへの二郎なをさねとなのり、はたのものにもあらはし候、よしとも聞召、げにも此あらまはしは、せんねんつゞさにきゞぬれ共、思ひわすれて有けるに、いくたびきくもいさぎよし、さて五ばんめのいのしゞのさしものは、みうらの大介かちやくなん、すきもと太郎な、わとの家は家につたはるなかしろをこそさすへきに、さもなきことはいかに、よしひろ承り、さん候おそれながら、いのしゞと申けた物は、おのれとぎしんそなはり、いさみをむねと仕、人にごとばをかけられては、すまんのなかやいばげんげきをもおそれす

かけ入、たけき所の心ねぶしたる者はあやかりてもなをあやかるへきはいのしゝ也、さるによつて存所にて、さてこそさして候、

よしとも聞召、あつはれすゞしきしんてい、かんたんするに余有、さてそのつぎはしやていあら二郎よしすみ、な、ムんぢは大介かことはいへと、はくふあくら三郎か家をつぎ、七つぢやうちんのさしものたるへきに、一つぢやうちんさすことは、何ゆへそ、よしすみひざをしなおし、さん候やうふにて候しあくら三郎は、大くま川のかつせんに、こん五郎かけまさと、たかにさきをあらそい、くび七つ取、それより七つでうちんをさし候と承、さ程な高きさし物を、それかしちやくねんのぶんとして、なましいにすいさん仕、家のなを下さんこと、いかゝとそんし、さてこそりやくして候、此たひのかせんに、所存のとをりのはたらき、いたし候はゞ、つたはる所の七つてうちん、さしたて上らく仕らんと、さもいさきよく申せしを、ほめぬ者こそなかりけり、

よしともきゑつあさからす、たのもししく、げにかたゝかしんていにては、めに立はまれ一でう以ていたすへし、此たびはげんへいあいならんでぶりやくをあらそふいくさ也、申まてはなけれ共、おくれを取なめんゝ、ぬけかけかうめう（四ウ）だい一也、千に一も、きよもりにしをくれなはずは八まんもせうらんあれ二たびたちのつかをにきるまし、われかやうに思い定るうへは、何れもほ

つする所存有へし、さきへは一足もすゝむ共、うしろへは一そくも引へからす、む二む三のかたてぎり、めいをみちんになげうつて、はけめやゝかたゝと、しきりにげちをし給いける、かのよしとのしんてい、あつはれぶんふ二だうのめい將と、ほめぬ者こそなかりけれ

源平いくさろん

二たんめ

去程に国しけは、一もん家の子をちかつけ、そくぢにじやうへ取かけさせてはかなふまじ、ではりをして相まてと、しやていみすみの源次よししげ、二万よき相そへ、こむろのはらにきどさかもきをひつかけ、やぐらかいだて打ならへ、ぐんはうせいよりはり、上を下へとかへしける、去程にていとより、うつてのせいよをひについで打程に、はやしんしうにつきしかは、先むかいちんを取給ふげんしかたのせんぢんは、かまだ二郎まさきよ、平家かたのせんぢんは、ちくこのかみいゑさだ、さて兩大将、同げんし、ゆばくをひかせ、しゆひつ物見をさうに置、ぐんぜいのかげ引、かうをくをるさるゝ、誠にざしきのまへのはれいくさ、たれかおくれを取へきと、兩ぢんたがいに入みたれ、おふつまくりつひはなをちらしてたゝかいける、へいけはげんしをぬけんとし、げんじはへいけにまけじと、たがいにさきをあらそふて、源平の兩大将さいのしつまるひまもな

し、しきつてげぢをし給いける、

然所に、平ちの侍大将ちくこのかみ家さた、ひたの三郎かげ家、げんじをくぶつて一かせんと心かけ、二人か馬しるしをさうにたて、ちかくとつめかけゝる、しろの大將みすみの源次、此由をみるよりも、只今よせたるはへいけかたのぐん兵とみへたり、心にきことなし、あれかけちらせ、承り候と、馬むしやかち、たち二千よぎ、一どについてぞ出にける、只このはのちるかことく也、家のはた馬しるしをみな打すてにけゝれば、しろのせい共はた馬しるしはい取、本ぢんへ引かへし、きどさかもぎをゝしたて、いてをやくらにひつしとならべ、大將よししげ大おん上、此しるしはへいけかたのと覺へたり、家のもんをかたぎにばゝれしは、かうめうかちしよくか、いかにくよはゝりける、きよもり大きにいかりをなし、やあみかたのぐん兵共 (五才)

挿絵第五図 (五ウ)

挿絵第六図 (六オ)

よしともみ給い、始より源平兩はたにてはよせずして、なましい成ことをふるまい、みかたにおくれ付しふかくさよ、たれか有くとの給へは、れいの六きのわかむしや、是に候と、いれ共ぎれ共もちいす、只一すちにそかけこみける、大せいのてきをなんほくにかけちらし、ぶんとりかう名、しよぞんのまゝにしつくと立出る、先一はんはひら山のむしや所すへはる、生年十九才、打取所のくひはちさん申に及はず、此はたは、へいけのせんちん、ちくこのかみ家さたのもん也、たしかにへんしんいたさん、二はんは、しやてい平山の二郎すへしげ、つもる年は十八才、此はたも同く、平けのしるし也、みかたのちしよくと思ひ、ほねをくたきてはいかへしたり、かうなんをはれ給へと、あけにそまりてかけ出るは、あつはれきりやうのいきほいと、けんへいとにほめにける、三はんはみうらの大介かちやくなん、すぎもと太郎よしひろ、今年十九才打取所のくひは、てはりの大將みすみの源次よししげかくひ也、そのほかのはたらきは、ひろう申に及すと、さもおうやう成ていたらくげにもみうらの大將やとばんみんふかくかんしける、四はんは、いのまたの小平六のりつな、生年十七才、家につたはる三つくひのしるし、今こそあらわし候と、打取所のくひはたのうへにつらぬき、につことわらい立出る、五はんはくまかへの二郎なをさね、此くひはほくろくたう七か国にそのなをあらはず、くりはま大きうかくひ也、しる

しうへにさしたるは、姦ちこしなのりやうこくにて、四人のはせうのたつしやとよはれたる、うへ山源太まつひろ、へいなくかくひ也と、ゆんでにいたてられたる二すちのやを、おりかけちしほにそまり、さもゆうく／＼とひかへしは、只きしんのしよいにことならず、しかれば、みうらのあら二郎よしすみ、せんそよりつたはる、七つてうちんのさし物、思いのまゝにいたしたりと、打取所のくひしるしにさしならべ、しつ／＼と引かへす、此者共かふるまい、あら人かみ共いつつへし、よしともの御よろこひ、なにゝたとへんかたもなし（六ウ）

源 平 軍 論

三段目

さてそのうち源平命をかきりにいせいをあらそふその中に、六人のわかむしやのはたらき、はんみんにすぐれける、こゝに平山のむしや所すへはる、ふん取かう名ひるいなく、ひめもすたゝかいくらし、やいんに及ひ、少しものゝくをくつろげんとするに、こしにさしたるしるしなし、こはいかにさては、てきちんに取おとしたらん、天かにかくれなき、かたをなみ、かたきのてにわたしなば、平山か弓やはなくすたるべしゑうんめいこゝにきはまつたり、天あけなば、てきちんに打こへ、存る所是有と、ゆめもあかさす待あかず、誠に人うまれて、三か国にてはつるとは、よくこそつたへお

きたれ、うまるゝ所はむさしの国、そたつ所は、おち国はるにつき、さかみの国にてせいてうし、さいこは、しんしう、こむろかはらのつゆときへんはかなさよ、さてかく思い定だん、おとゝすへはるにしらせたくは思へ共かくと聞なば、共に打しにせんはひつてう也、然らば平山の家なかくたへなん、又しらせす出る者ならばふかきうらみと也なん、よし／＼へたてなきしんてい、かみもあはれとしり給へと、思いの色を有し所にかきとゝめ、あけゆくそらともろ共に、只一すちにいそぎける、

かたきのやくしよに也しかば、姦ひらをたゝきこ姦を上是は源じかたの侍、むさしの国のちうにん、平山のむしや所すへはると申者にて候然にいせんのかけあい、それかし家につたはるこしさしこちんちうにおとしおはん、さるによつて、びめいより、是へ罷むかつたりねかはくはかのしるしを一めみてこんせうの思（イ）いなく打しにいたしたく候、侍はたかいかのこ、こはうしあれとよはよりける、しるのくんへう是を聞あつはれけんしの侍ほとふてき成ことばなし何ことをかし（イ）いたさんとすまんの中へ只一人かけ來ることよくふかきしんてい也、それ／＼とてはたこしさをやくらの上にならへ、此内にごぶんのしるしや有、平山みて、みなみより三はんめかたをなみのこしさしこそ、尋るしるしにて候、今はうきよにのそみなし、とてもものにぎとをひらき給い印と共に一めいをくんちうにとゝ

め給へ、いかに／＼と申せはよくんせいきもあへず、此間のた
まかに、源平の印、か程でちんにすてぬれ共、たれ有てかくと
いわす、ごぶん一人なをうしみ、来給ふたくいまれなるぎしんたり、
只今のうちしには、ひとへにいぬしにたるへし、か（七オ）

挿絵第七図（七ウ）

挿絵第八図（八オ）

さねてちうをはけまれよ、印をは参らするとやくらよりなけふかく
かんして入にけり、すへはる印をおつ取、あうてきなからも、なさ
け有つる物はしての山のふもと迄、おもむきたるわか命、ふしきに
うきよにかへること、弓やかみのしゆこたるへしと、ふかく／＼と
立歸所にゑちこの国のちう人、いからし藤太たゝひろ此由をみてく
んちうにててき一人打取は、みかた千きのつよのといふくんしよを
知ぬふかくきよと、よつ引ひやうとはなつやに平山かよろいの引合
にはつしと立、さしものゆふしといへ共、いたてなれはいぬいに
うとたをれける、いからしすはしすましたりと、きとをひらきかけ
よるを、よこて切にはらへは、めてのみゝのはつれより、一もんし
に打おとされろくちにかつはとふしにける、しろのせいみるよりも、
今はあますな打とめよと、かけ出んとする所へ、平けのくん兵、す
千にてよせければ、さうなくきとをひらきへす、きよもり見たいあ
れにておいの有はみかたよりのぬけかけと覚たり、いかに／＼との

給へは、われも／＼と立より、ことのしたいを尋ければ、さん候
むさしの国のちうにん、平山のむしや所すへはると申者にて候かた
／＼は平けの人／＼とみ申たりそれかしをげんしのちん所迄かいし
やくして給れ、かく申こと、まつたく命をしむにあらす、此こしき
しに付存むね候也、はうしんあれとそ頼ける、きよもり聞て何平山
と申かけんしかたの侍か、余高名かをにふるまふにたゝすておきて
打せよとせめ口を引かへすはなさけなふこそみへにけれ、すへはる
みてかく有へしと知ならば、中／＼頼とはいはしもの口をしのこと
共や、われは平け方の馬印を、命にかへてばいかへしてゑさせしに、
おんをしらぬやつはら哉と、はかみをすれとかいそなき、しろのせ
いはるかにみててきそのまゝひつかへせしは、うしろにふせゝいか
まへ置、きとをひらかはかけ入らんとのちりやくたるべし、そこつ
にぎとをひらくな、あつむしやをは只いとれ／＼とさし取引つめい
たりける、むさん成哉すへはるか、こてのくきりとふともゝにかさ
ねて二すち立、今はかうよとみへし所へ、しやてい平山、あにかか
きをきにきもをけし、あとをしたふてかけ来り、いるやを四方へ切
払、兄をかたに引かけ本ちんさして帰ける、

ちん所になれは君もおとろき出給ふ、その外のはうはいたち、あと
や枕に立より是は／＼と斗也やゝ有てすへはる、かいしやくせられ
おきなをり始終をくはしく申上れば、よしとも聞召、さてはさやう

に有けるな、きよもりかふるまいことはにもべられす、此へんれい何とそしてかへさん、よし／＼めくるしせつ有なん、いかにすへはる、何にても心にかゝること、あらは、つぶさに（八ウ）

挿絵第九図（九オ）

申おけと立よらせ給い、ながるゝちをかきなで／＼、あつたら若者をむなしくなさんぶびんやと、大将御なみだにむせばせ給へは、上下ばんみんなをしなへて、こゑを上てぞなきにける、余のことにしやていすへしげ、うらむることぞあはれ也、やうせうちくばの昔より、しなば一所とむすびしに、只一人の兄弟に、心を置知せ給はぬうらめしさよ、つゆ程かくと知ならは、一所にかばねをさらさん物、六どむすびて兄と也、七どちぎりて弟と成、兄弟のよしみも今かきりぞと、たかいにめとめをみ合、ふかくのなみだせきあへす、すへはるくるしげ成いきをつぎ、なんぢにかくとしらせぬは、へだつる道にてまつたくなし、平山の家たへなんかなしさに、わざとつゝみて有ける也、うらみを残ことなかれ、此たちはぢうだいのてうはう、おことに是をゆつる也、今よりしてはむしや所を相つぐへし、又此さしものは、それかさいこのしだいをかき印、うちがみ明神におさめよ、申まてはなけれ共、君にちうせつこまやかに、人／＼にれいあつくぎしんをむねといたすへしそれかしうきよに有やうに、心づかいを仕、はうはいちちにくまれな、いかにめん／＼、ぶも

にはやうせうよりおくれ、天共ち共頼をかけしそれかしむなく成ならば、頼方なきすへしけに、なさけをかけて給れ、若者のことなれば、たとへぶれい候共、ゆうめん有て給れ、おいとま申てわが君様、いとま申ぞはうはいちち、なごりをしのすへしけつと、是をさいこのことばにて、くさばのつゆときへにけり、せんでうのならいに、ゆふしの打しにめつらしからねと、大将御ひたんかぎりなく、こさを立せ給いける、すへしけはひとへに、ゆめの心にて、しがいにひしと打かゝり、さてもあだ成しやばせかい、今迄のかせんには、かくる時も二人つれ、ひく時も兄弟つれへんしもはなれさりけるに、どくしんと成にけり、思へは兄のかたきはきよもり也、いでほんまふをたつせんと、とんで出を、ゆんでめてよりすがりつき、こは物にくるふか申所はことほりなれ共、さやうならばげんじ平け、どしいくきに及なん、しからはかたき、そのついへにのらんことひつてう、大じのまへのせうじ、是にすぎたることあらし、ひらに／＼とせいすれば、ひら山きゝて、もくぜんにうたるゝみかたをすて置てたすけぬものを、てきとやせん、又みかたとや申さん、大事もせうじもことにこそよれ、あくぎやくぶたうのきよもりめか、まつかうふたつにうちくだき、あにのきやうやうにはうぜんと、こゝはなせ／＼と、かけ出ん／＼としけれ共、大ぜいにせいせられ、ちから及すとまりける、むねん共中／＼申斗はなかりけり（九ウ）

扱もそのうち平家の大将きよもりは、もとよりしよくの侍にて此た
びが源平いせいをあらそふいくさ也、とかくまづ、けんしをなづけ
したしくするならば、大かたのひだうもおんみつならんと、つね
くいんしんいんぶつおこたらず、あまざへさまく〔脱カ〕のつくり物を
からくみ、きんへんのゆうくん共をあつめ、けんしをせうじ申さる
ゝ、中将やくしよに、うつられければ、きよもりよにへつらへるふ
ぜにて、誠にうんしやうの御すまいを引かへ、ならばせ給はぬは
にふのこやに、何はにつけてくもいのそら、思召出され候はんとさ
つし入候と、さまくにもてなしける、さだもとゑつきかきりなく、
かんじ入たる御しんてい、是に過べからすと、立よつてみ給ふに、
先一ばんは高さこの、まつにこまつをうへそへて、ちとせをたもつ
をいつるの、是や誠に相をいの、いなおふせ鳥のふたばしら、いも
せのはしめそしのぼるゝ、さてそのつぎはほのくくと、あくるかす
みの下よりも、むめの花がさかづきつれ、かもなつかしきいにしへ
の〔カ〕かんせうくの御ゑいかにあるじなしとてはるなわすれそと、て
いとのはなをこい給ふ、心つくしのうきたびを、今身のうへになぞ
らへて、都のはるぞなつかしき、三はんはゆふこくの、したばく
もかれはてゝ、つもるしら雪きへくと、みにしみわたるふゆのそ

ら、なをさかつきのかずをまし、くむにたへせぬけしき哉、四ばん
にはむさしのゝ、くさばくをわくる月、昔男なりひらの二条のき
さをはるくこゝにたび衣、きつゝなれにしいにしへも、色にひ
かれてみをこがす、かのもろこしのはくてんかしゆかうざんのたの
しみも、是にはいかてまさらんと、上なか下に至まで、しゆにまじ
われはくれないの、うつろいやすき人心、大じをまへにかゝへつゝ、
かゝるしゆゑんにてうずるは、はかなかりけるしだい也、

然所によしともの侍、すぎもと太郎よしひろ、かせんのないだんと
して、つかいにこそは来りけれ、侍共つぎのまにてをしとめ、御ま
へには御しゆゑん今がなかば也、御ようあらば申おかれよ、よしひ
ろきゝて、かゝるぐんちんにてしゆゑんとは心へず、よしたれ人の
まします共、大事のつかいなればじきに申さてはかなはず、のび
くくにいゝおくへきにあらず、そのき給へとつきたをし、さしき
につつと入是はよしともよりのししやにて候、参だんはやせんかた
きのちんへあらてのせい一万余くはゝり候、よつ (十オ)

挿絵第十図(十ウ)

挿絵第十一図(十一オ)

てじんばのつかれなをらぬさきに、雪ふるをさいわいに、かたきゆ
だんの所へ、今日取かけ給んや、明朝をしよせ給んや、いかゝ承ら
んとのつかいに候と、つしんでのべければきよもりきゝてつかい

にれいぎのけしきもなく、まつ以て今日取かけんこと、此大雪にぐんぜい弓引こともかなはんや、明日さう天にはむやく、みのこくのしゆつちん尤たるへし、さいわいそれかしがらうどう共、ぶんこくよりはせ参間、此あられてを以てせんちんにすゝみ一せんはけみ申さん、こつめ有へしとつぶぎに申されよと、おふ心(マコ)に申ける、よしひろきゝて、あつはれぶれいのことば哉、こゝををくする物ならばげんじのなをりたるへしと、ひざをしたてそのだんは申までに候はず、人のこつめなどは、中々いたされ候まし、只いつものこととく両はたにて御かゝり候か、又きこつ御ちんにひかへさせ給へ、よしともせんちん仕り、此両ぎの外はべつでうさらに候ましと、はかりなく申ける、平けのこつげんちくこのかみ家さた、ゆんでにより、御ぶんはいか成者にてかくは申ぞ、みうらのわださへもんがまご、大介が一なんすぎもと太郎よしひろと申者也、ようばし候か、家さたきゝて、よし何ひろにてもあらはあれ、しゆくんのつかいをいながらかへすこと、ぶれいのいたりならずや、よしひろにことわらい、それよの中は、かぶみのものをてらすかことく、われふれいなれば人ぶれいす、只かたちにかげのそうかことし、よしなきことをいはんより、此りをさつとあきらめられよ、さてこくげん(マコ)はなをくみのこくにて候な、やくたくしつねんなさるゝな、御いとま申候、御めんあれやめんくと、とうさいをぬめ付、御ちんを

さしてぞ帰ける、きよもり此由みるよりも、只今のていを御らん候か、上をまなぶ下とやらんにて、げんじかたの者共は、上下共にれいぎはかつて存せず、いかにげむことなればとて、此大雪にいぐさ成へく候や、すいりやう仕に、よしとも此くわいをよく存、へんしうの心と覚候と、いよゝゝゑいをもよほす所へ、かさねてかまたの二郎はせ来り、さき程もつかいを以て申候へ共、のびくゝなる御へんじにて候、かたきはみなかん国にすみなれ候へは、かほと雪をば物の数共仕まし、その上あられてはより候へは、もしさかよせによすることも候はん、人にさきをせられては、のちの軍しにくき物にて候、只今日取かけ給て然べう存候とのつかいに候と、いんぎんにのべにけりき (十一ウ)

挿絵第十二回 (十二オ)

よもりきゝて、さいぜんも申通、此雪にては人馬のかけ引もしゆうならず、をしふせ候共そのせん何か候はん、只明日のかけ合に相さためられ候へさいわい中將殿もこれに御入候、きよもりか存おもむきと、御とういにて候と、つぶさに申給へとくゝとあれは、かまた力及ずやく所をさしてぞ帰ける、きよもりみて、右申ことく、へんしう致候、てきいかに雪国の者なればとて、此かんきにしゆそくもはたらき申さんや、その上是程の大くんをみなから、さかよせなとゝはことおかしきこと共也、よしともかはげむも、きよもりがゆ

だんもぎのみかはり有ましと、いよ／＼しゆけうにてうずるは、あさましかりけるしたい也

あんのことく、すてにやいんに及ければ城の大將、よせては都そたちにて此かんきには心たゆみゆだんせんは一てう、ついへにのつて打ちらせと、あらてのせい一万よぎ、ひし／＼とをしよせ、時の声をどつと上、いきをもつかせめにけり、もとよりゆたんの平け、何かは以てたまらん、只とろにゑゝるうをのことく、たちぬくまでもなく、ぼつつめ／＼打るゝ者八百よ人いけ取百六十人、此外あく所なん所におち入て、しする物千よ人、残者はちり／＼、あきのこのはと也にけり、城より出せい共は、一所にひしと打より、いさ此ついでにけんしのちんをもかけちらさん、尤然へしと、一てに也てをしよせ、時のこゑを上にけり、よしとも此由き／＼給い、やあをとせてかたきを引入よ、承候と、つるくいしめしやたばねとき、とうざいひつそとしたりけり、かたきのせいはをみて、うんつき弓のけんじのせい、物見もおかずふしたるそ、只せめ入とゑいや／＼とこみ入けるけんじ思いのまゝに引入、いきが百きに向程のあら物、一どについてそかゝりける、城より出せい共、あはてふためき引程に、けんしおつすがうて城に入ひのてを上てせめければ、こむろかはらのはりの城は、そのよにせめおとされ、ほん城うへた山へそ引にけり、てをいしんは数しらす、打取所のくび共、てんてにちさん

し、けめうじつめうこゑ／＼になのりける、中にも五人のわかむしやはむねとの者共五き三きつゝ、いけ取、ひつさげ／＼立かへる、しゝふんちんのいきをいは、天ちにあまりてみへにけり、へいけはたせいなれ共、一せんにもおよはず、にげゆくげんしはぶせいなれとも、くいつめてきのしろまでとりにけり、あつはれうんでいばんりのちがいやと、天下のさたにそおよひける、よしともくんはうしそつのはたらき、たぐいまれなること共とみな、かんせぬ者こそなかりけれ (十二ウ)

源平軍論

五段目

さてもそのゝち、こむろかはらのはりやぶれぬれば、国しげ大きにどうてんし、にはかにしやうじんけつさいし、はういちぢやうのゆかをいわせ、天にむかつてかこつやう、そも／＼ちゝにて候し、みすみの入道くわいじつは、月／＼の七よまちおこたらす、しぜうしんに日月の二天をふかくねんし奉りぬ、又それかしかよにも、それほどにこそなければ共、たつとみ申ことはなはたし、然に一せのこと、此たひ也、ねかはくは力を合、かたきを千りの外にしりぞけ、かつことをいやくのうちにゑさしめ給へと、かんたんくだきいのりける、時にふしぎや、天女一人こつぜんとげんじ給い、玉のてばこを国しけかまへに置、みすがたを引かへ、こくうにあがらせ給いけ

り、国しけてはこをおしいたゞき、一もん家のこよびあつめ、三どはいしふたをひらきてみてあれは、一しゆのうた有、かぎり有、秋のくさばのかれゆくに、何いのるらん心つくしにとかきて有、国しけいろを引かへ、かれゆく草をたすけてこそ、天のじひとはいふへき、げに只今のは、日天にも月天にもあらず、あくまげたうの天ぐのしよいと寛たり、あましぬるこそ口をしけれと、こくうをはたとにらんで立たりしは、よにもくるはしくそみへにける、

やゝ有てこむろかはらへさしむけし、侍大将、みしほの伝内としはるをちかつけ、此たびこむろがはらのではりを、そくじにせめやぶられしは、しそつのおくびやうゆへか、又かた／＼かぐんはうあしきゆへか、しさいはいかにと、おもてをいらゝげ尋ける、としはる承、さん候よせてはたせい、みかたはぶせいと申せ共、はげむ所つよきゆへ、平けのせいはそくしに打ちらし、すでにかうよと存所にけんじの大将よしともに、ふりよにははかれ、ふかくを取て候、そのうへげんけの侍共は、おや打れ子打るれ共、かへりみす、のりこへ／＼、うて共きれ共ひるまず、ことにはみうら兄弟、くまかへ平山いのまた、かれら五人のわかむしや共がはたらきは、ひとへにきじんのことくにて、むかふてきをは打ちらし、はせよつてくまんとすれはうま人に取てなげ、ぢうわうむけにふるまい候間、いかにいさむ者共も、たまりかたかく候、只いかにもしてかれらを、うた

んはかりことこそあらまほしく候と、大いきついで申ける、時に
(十三才)

挿絵第十三図(十三才)

挿絵第十四図(十四才)

国しけかをい、いるまのすくねみつあきらとてそのたけ六尺五寸、もろこしのしはうがじゆ^〇を、たな心にをしにぎり、弓や打物取てのたつしや、同一ぞく、うすいぎやうぶたゝつね、みすみの源次ざへもんかつきた、何れもそのたけ六尺に余、まなこざしつらたましい、ばんにんにかはり、ひとへにやしや共いひつへし、ならびにきだうあらいしとて、ほんらいはでわの国はくろさんにすみけるが、じやくねんのむかしより、はやはさうでだて、あくそうのなを取、ついにはしゆぜうさいどのじひにんにくの衣をぬぎ、じやけんしゆらのちまたにみをよせ、今みすみの家のゆふしとして、ばうじやくぶじんにおごりける、かれら五人、みきのあらまし聞よりも、ひさをしなをし、何しやつばらがゆふりき、何とはげむと申共、わづか十七や八にて、いまた力もきたまるまし、何程のこの候はんかれら五人をは、われ／＼一人つゝうけ取、しやくびねぢきつてすてんこと、たな心のうち也とともなげに申せは、国しけきゝて、あらたのもし／＼、大将よしともをは、それがしにまかせよ、人じゆづかい軍だて、よしともわれにかてか及ん、心やすく思ふへしと、

こ脱力

じよせいをいさめげちをなし、よするかたきを待いたり、去程に、いさみにいさむげんしのせい、何かはゆうよいたすへき、じこをうつさず取かけ、時のこゑをぞ上にけり、時のこゑもしつまれば、五人の者共、糸物くをひつさげ、よせてのせんちん三千よきにてさへたる、まん中へ、八もんしにわつて入、とうざいなんぼく、ひしきつけてそとをりける、もとより力人にこへ、打物取のたつしや、さすがにたけきげんけの侍も、四^四方^方へかけちられ、すゝみかねてそみへにける、こゝに五人のわかむしや共は、せんとのいくさをはけまんと、一所にひかへいたりしか、此由をみて、かれらこそ国しけか内に、四ほく一そこのあら者と、なにしあふたるほうしむしや、のそむ所とかけ出る五人の者共みるよりも、さきほどより、うてにもたらぬざう人ばら、そゝろにうつてすてしも、かた／＼にあはんため、はな／＼しく參ん、やあ両ちん共にやどめをし、めさましいくさをみ給へと、かうせうによばゝり、先一ばんに、うすいのぎやうぶたゝつね、四尺三寸の大たちを、ひつさげ、何れにてもそのそみしたいに、二きも三きもより給へ、めつらしたち(十四ウ)うちし、てきみかたのねぶりをさませんと、あたりをはらいてひかへける、みうらのあら二郎是を聞、ほつ国方はいさしらす、さうじてげんしのならいて、てき一人を二き三きにて打こと、むしやのはたらきとせず、しやくねん也共いざげ

んざんと、たがいにたちをばつしと合、きりみたす、しばしせうぶつかざりしが、うすい少うはてに也、只一たちにと打を、めてのかたへひらりとゝび、くびちうに打おとし、きつさきにつらぬき、是み給へとさしあくる、よせてはゑびらをたゝきとよめけは、じやうにはうたれおともせず、

二はんにみすみの源次さへもんかつさだ、大なきなたをてごろにふり、けんじかたの侍共、此なきなたにかゝりつゝ、五十年のくわんらく、いたづらに三づにかへらんむざんざよと、四方をにらんで立たりけり、すぎもと太郎聞よりも、なんぢらかゆふりきは、むてうじまのかうむりならん、われらにあふてかうげんはむやくと、しづ／＼とわたり相、あふつまくりつたゝかいしか、すぎもと天めいきはて、もちたるたちつばもとよりおれにけり、こはなむ三はうとむずとくむ、てきもみかたも是をみて、すはてづめのせうぶよと、たかにゑいや／＼と力を合、もとよりすぎもととう八か国にならびなき大力にて、くさずりかいつかみ、ゆんでのそはへはねたをし、けんじのてなみよくみよと、ちうにひつさげぎゝめかしてひつかへす、いるまのすくね是をみて、あまざしとはがみをなしてかけ出る、いのまた多たりやあふとはせ合、ゆんでへひらきめてへぬけ、こゝをせんとせめたゝかふ、いのまた何とかしたりけん、いるまかたちをうちはつし、こてのはづれへきつさきあがりうちこまれ、した

てに也てきり／＼と引にけり、いるま今はとたゞみかけてちやうど
うつを、しと／＼うけとめ、ゆんてのたかもゝなぎすへ、おさへてく
ひを打おとし、きざよりなかるゝちに、きたる物のゝくれないにそ
めかへし、少もをくせず引かへす、むしやぶりのみことき、たぐい
まれにそみへにける、

あとにひかへし二人のはうし、三人のはうばいを、もくぜんにうた
せ、はかみをしてかけよる、くまかへ平山是をみて、てきまければら
をたて、まなこくらみたり、と、打上るけんの下よりつと入まつ
さかさまにはねたをし、ひた／＼と打のり、ねんぶつ申せはうしば
らと、くび一／＼に打おとしあら（十五オ）せうしのごぼうたち
のさいごやと、につことわらひ立にけり、

城のぐんぜいかりをなし、きどをひらきかけ出んとするを、ゑた
りやおふと五人の者共、さきがけにて、一どにうまをそのり入けり、
大將くしけは、あんないはよくしりたり、みなみのてのなんじよ
をぬけ、おちゆく所に、かみやきたつてはつしと立、まつさかさま
におちにけり、時にきよもり、はいぐんをあつめをしよするに、道
にてはたとゆきあい、かきくひにしりたりけり、みぐるしかりけるさ
いご也、きよもりみて、大將を打ことせん一の高名、いそきて城へ
のり入、よと、からめてよりとつと入、げんしのさふらい共か打す
てたるてをいしにんのくび、一／＼に打おとし、かう名がは成ふぜ

いにて、一どにときを上にけり、げんけの侍共は、つめの城までの
りこみ、つまり／＼こかけて、大將国しけを尋めくる、折ふしと
きのごゑにおどろき、われも／＼とかけ出見れば、きりすてたるく
び、てんでにひつさけ、一ばんのりきよもりと、きしよくかうでぎ
ゝめきける、げんしの兵いかりをなし、一ばんにも二ばんにも、平
けのきは今まで、かげもかたちもみせずして、われ／＼かてにかけ
し、しにんのくびを取もつて、さたに及はぬかうげんやと、一どに
どつとはらいけるきよもり聞て、やあびるう也なんぢら、それかし
は今朝よりかゝり、からめてへ取かけ、かけ引のかせん十一たびに
及、城へ一ばんにはせこみたり、そのせうこには、大將国しげがく
び是に有、ふしんはあらしと申せは、げんし二条の中將、いやろん
はむやく、さやうのあらそいあらせしかため、此きたもとちよくを
かうふり、つきて有、せうぜきにはそれかしか立へしと、一ばんく
ひ一ばんのり平のきよもりとかきとめ、上下のくひてう相しるし、
千しうばんぜいめてたしと、そのまゝ國をそ立にける、

源けの兵是をみて、こは何ことぞ、われ／＼かほねをくたきしかう
名を、人のほまれにせられ、いきたるかいの有へきか、おつかけ一
きものこさす、打とめんとはしり出るを、よしともごらんし、やあ
せんなし／＼なんぢら、かほとうんでいばんりのちかかしことを、
ひいきへんばも叶はんや、先しつまり申せとの給へ共、けつきにい

さむわか者共、こは御でう共寛へす、すてにげんしに一所にて、もくろくとまるうへは、こなたにはしやうこなし、一ぜうひにおち申さん、その時いかにくゆる共、さらに急ぎ候ましと、もたへける中にも、平山人は何共あらはあれ、それかしかためには、あにのかたき（十五ウ）すは八まんも、いかてか以てあまさんととんで出れば、われもくくとつゝきける、すでにかうよとみへし所に、ぎよもりうんめいつよくして、やうやくそこをかけぬけ、しだいにそのあいへたゝれば、さすかいさむすへしけも、力及すひかへける、平山かしんぢう、むねん共中く申斗はなかりけり

源平軍論

六段目

去間源平の両大将、らくやうにかいぢん有、たかいにうつぶん有よし、天そりに付しきつてそもん有ければ、みかともだし給ふに所なく、御さたのため、しゅんでんにしゆつぎよ有、先ごせつたかづかさ、さうの大しんだなごん中なごん、五ぬ六ぬのしんにいたるまで、是そぎたいのけんもんと、われもくくとさんたい有、きよもりよしとも二人の間は、つくし大名きくちはらたしかうす、さてげんべいのしよ侍は、家の大じ是也と、われおとらしと相つむる、時にきよもり、一つのそでうを御まへにさゝけらる、う大へんとしなり承、たからかによみ給ふ、そのぶんにいわく、日月は一もつ

ためにくからす、かるかゆへにめいくんのとくは四かいに大まねし、そもく此たび、源平両大将として、ほくてきけいばつ（一六ウ）のせんしをかうむり候所に、よしともたのいあらんことをそねみ、げんしのげちにしたかはすして、きよもりにばんたんしめし合、ぎもなくんばうにそむき、よ打ぬけかけ、かへつてみかたのよはみを仕出し、かせんすてにあやうく候を、それかしちんへいちやうりやうかはかりことを相まもり、ふりよのせうりと罷成を、よしともいよくへんしういたし、うへだの城らくでうのち、わか侍共をはなち合、すこぶるらうぜきに及候を、けんしさともおんびんに相しめされ、両けつゝかなくせうらく候おはん、ねかはくはみぎのせひつまひらかに、ちよくさいをあふき奉る、せいけうぎんげん、せうらく二年正月十一日、平の清盛とかうしやうによみ給ふ、時によしとも、是もそでうを上らるゝ、そのおもむきにいわく、右つしんで天ちのとくをあんするに、水はくぼきにながれ、ひはかはけるにつきやすし、十ぜん（一七ウ）の天いを、下としてにこす、まに天ばつ（一八ウ）のかれ奉らんや、すべからくこんどのいこんといつは、きよもり軍のかけひきを、つぎにいたし、びぢよをあつめ、いろくのばさらをたくみ、しゆゑんゆふけうをことゝす、是しかしなから、けんしの心を取、よしともをつみせんことをはかる、よつてけんし、たちまち清盛に（十六才）

挿絵第十五図(十六ウ)

挿絵第十六図(十七オ)

こつにくのよしみふかく、よしともにはあつとへたて、けんしよりはけみ候高名をかへつて、へいじの高名としるし、らくでうのまぢ、国のしおきにも及ず、さうくひつ取候おわん、つらくく此たび兩けのかりを申さは、けんけのはたらきは十にして平けのはたらきは二つにも及ず、然をしきよを以てはくゑをこくゑといたし、くるまをよにおさんとほつす、はやくけんばうの光をあきらかにしやうばつの二つ、こいねかい奉る、しやうらく二年正月十一日、源の義朝、つしんで申と、たからかによみ給ふ、きよもりきよて、いかによしとも、何それかしかしゆくゝのばさらをつくし、しゆゑんにてうじたるとは何ことそ、ゆふ女をあつめばさらをつくせしこと、まつたく以てなしごぶんかいふは三月二日のよ、こむろかはらにてのくわいがうのぎならん、それはみかた打とけたるだんをてきにみせは、さためてきどをひらき打て出へし、時につけ入し、てづめのせうふはげまんと、わたのか方へもつかいをたてしかとも、そのないだんに出合す、あまつさへ平けのせいそらにげしかたきをまん中に取こめ打んとはかるを、ごへんよこやにかけこみ、大じのてきを打もらすこと、ぜんだいみもんのひがこと、いかにくんと申ける、よしとも聞給い、何それかしかかたへ、ないだんのつかいとは、

以ての外のそらこと、ことばにものへられす、けつুকなたよりこそ、かたきにあらてくはより候間、ゆだんなくいそいて取かけ給へと、始のつかいにすきもと太郎よしひろもつて、申候しか共、四きのつくり物をからくみ、ゆふくんにおほれ、このかんきには、しゆそくもはたらきかたし、明日さう天にはむやく、みの時のしゆつぢんとへんじ有しいかに、さて二ばんのつかいには、かまたを以てかん国にすみなれたるてきなれば、かほと雪をはことのかす共いたさし、ひらにゆだん有へからすと、さまくゝに申せ共しゆゑんにてうしさらにせういんなかりしいかにあんのことくかたききかよせに取かけしに、一せんにも及ずはいぐん有しを、はやくも思いわすれ給ふな、きよもりきよて、されはこそとよ、右いふことく、てきをたばかりそらにげし一きものこさす打んとせしをわたのぐんはうをやふりかけ入、てににぎりたるかたきをもらしなから、かしこかほ成きよごん哉、よしともきよもあへす、そらにけとは五十丁か三十丁のこと、六七りか内には、かけもかたちもみへさりしに、それかしなくは、大方向迄も引れなん、近比めつらしきぐんはう哉と、あざわらつての給へは、なみいたる平けの侍(十七ウ) はらをたて、何げんじなくは都迄引んとは、余成くわごん哉、平けやつよきけんしやかつ、ぶりきは外にあらはこそ、いでげんざんと一どについて出にけりげんじの侍是をみてあつはれきゆふの人く哉只今の

いき、はいぐんちんにて少出る物ならば、此たびのいくきにあれほとはにげじ物しらすや、こゝは有かたくも十ぜんのぎよくいたり、びろうのふるまいせんなし、うつふんのむねをは、かさねて申承んと、つしんで相ならび、なをらうぜきに及ば、一くびねぢきつて、すてんと、しつまりかへつてひかへしは、よにすさましくぞみへにける、

清盛きよて、誠に上をまなぶ下とかや、すへくの侍迄、大将よしともがへうりをよくまなびゑて、いつはることのきよこときよ、にけたるやらん引たるやらん、一ばんのり一ばんくび、大将のくび取たるは、平け方にあらずや、いかにくとのしりける、よしともきよ給い、やあごぶんはさいせんこむろのいくきに、いづく共なくにけちり、うへだのしろへげんじせめ入てのち、やうくはいくををあつめ、はせ来り、城の大将おちゆくに、道にてふりよにゆきあい、打取、とがはに切すてたるしんのくびをひろい取、一はんのり一はんくびとなのりしこと、よにはかくれよもあらし、いかにくとの給へは、けんしきたもと、ひいきがほにてつと出、ろんはむやく、せうこは是に有と、くだんのもくろくを出さるゝ、う大へんうけ取て、よみ上る、大将国しげかくび、一はんのり一はんくひ、平のきよもりとするして有、よしともきよ給い、いせんもいふことく、御みと清盛とは一所なれば、せうことはいひがたし、さた

もときよて、ふせうなれ共天下のけんしかうむり、罷むかいしそれがしを、せうこといひかたし、とは、あつはれふかく人哉、此りいかにとせうもんす、

みかとゑいぶんましくて、みつだんにてつけし二人のけんしはいかにとせんし有、いがのはんぐわんみつた、とをくみのくわんじやたゝ時、御まへにかしこまり、もくろくをさし上る、う大へんみ給い、いかに両けの人く、此兩人はさう方へかくして付られしよこめ也、よくきよ給へと、もくろくをしひらきよみ給ふ、先十一月廿日、両せいしんしうこむろがはらにげちやく有、廿一日に、て合のかせん、平けおくれを取しを、げんじもちかへし、てきをきどの内迄ほつこみしこと、同廿九日、ほんでうよりでばりのちんへかせいくわよりしこと、そのよくじつ大雪、同清盛敷のはうらいからくみ、ゆふくんをなみすへ、けんしをせうじしゆゑんのぼへしよりをしよせ、かけちらせしを、げんじかたよりごつめをし、かへつてこむろの城をせめ取、すぐにはんでうへだ山へ取かけ、(十八才) さうなくしろをのり取、そのうち清盛はいぐんをあつめはせ来り、ふりよに大将のくびを取、げんけの侍か切すてたるてをいし人のくびをばい取、一ばんのりとなること、右のでうく件のことしとするして有、さだもと聞よりも、此かき付のおもてはあとかたもなきよごん哉、げにかたく、よしともとつねくした

しく申つうするにより、此たびが大じと頼れ、かくいつはりをはかきけるな、天りはくもることあらしと、大きいついで申せは、二人のけんしは、いや御みのかき付こそきよごん也、こなたにいつはりなき物をと、たかいのいこんはやまさりき、みかど此きいかにと、ゑいりよをくるしめさせ給ふ、げんへいのしよ侍は、うむのあんひいかよと、こぶしをにきりきばをかみ、ひたいにあせをそよきける。

時にくはんばく出させ給い、いつみかわちのむしや所、ひらのゝ九郎道のふ、のむら兵ごひろつくを召れ、此たひげん平のはた下に、五きないのせいあまたつくといへ共、何れもそのみのはぢをかなしみ、まつすぐにはよもいはし、つね／＼なんぢらは、ぎしんふかき侍とさたすれば、よもいつはりは申まし、みぎのしだい有のまゝにそうすへしと有ければ、ひらのゝ九郎しやく取なをし申やう、それかしは平けのはた下に罷くはより候、誠に御でうのことく、有のまゝに申せは、みのちじよく、又つゝめはもろこしのきよくはくかいつばりにも十ばいせり、よしみのちじよくはともかくも、天かの御さに、ひだうをおこなはせ奉り、まつだいのきろくにとゝめ申さんこと、こん生マご生のふちうもつたいなし、只今兩人のけんしものくろうのこと、此たひ平けのおくれことはにものべられす、それかしもかやうのひやうり人のはた下に付、一ごのふかくかうむり候、

弓やのめうが是までと、いゝもあへず、はらかき切てふしにけり、今ははやさたとも清盛も、口をとちてせきめんす、みかとげきりんかきりなく、さたもとをはきいか島になかすへし、清盛もどうざいたるへけれ共、父たゝもりがちう、今とても覚召わすられす、よつてるにんをゆるし、しゆつしをやめられ、へいもん有こそみくるしき扱よしともをは、下つけのかみににんじ、あふみの国を給る、時のめんほくよの聞へ、よろこひいさんで帰るゝ、よしものはんせうめてたし共中／＼申斗はなかりけり (十八ウ)

右一字一言不略以正本開之者也 明曆四仲秋吉

且正本屋太兵衛